

学位請求論文審査報告書

氏名 竹林遊

論文題目 僧肇における大乘菩薩の理解 - 『注維摩詰經』を中心として -

審査委員 主査 大谷大学教授 織田顕祐

博士（文学）【大谷大学】

副査 大谷大学教授 ローズ ロバート F

Ph.D【ハーバード大学】

副査 大谷大学准教授 采畢晃

博士（文学）【大谷大学】

副査 駒澤大学教授 奥野光賢

博士（仏教学）【駒澤大学】

I、論文内容の要旨

当該論文は、五胡十六国時代の後秦の首都・長安において活躍した僧である僧肇の大乘仏教理解に関する研究である。僧肇は鳩摩羅什の翻訳事業を補佐しながら、主著である『肇論』や『維摩経』の序文・注などを著した。当初は、特に玄学（老莊易）を学んでいたが、旧訳の『維摩経』に触れて出家したという経歴をもつ。従って、その著書には、時代的な影響もあって玄学用語が非常に多く見られる。例えば仏や菩薩について、老莊の究竟者を指す「聖人・至人」と呼ぶ場合などである。僧肇は、釈道安が格義仏教を止揚した後の時代に位置する鳩摩羅什の門弟である。それにも関わらず、頻繁に中国思想の術語を使用するのは、一体どのような意図があったのであろうか。

本論文はこのような関心にに基づき、代表的な初期大乘經典である『維摩経』に対する僧肇の理解を、『注維摩詰經』僧肇注を中心として検討したものである。

本論文の構成と主な内容は以下の通りである。

序論

本論第1章 『注維摩詰經』僧肇注における大乘菩薩理解

第1節 僧肇の菩薩理解の基盤

第2節 『注維摩詰經』における「七住菩薩」の菩薩像

第3節 『注維摩詰經』における無生法忍の理解

第4節 七地と無生法忍の関係

第5節 特定の人物を法身大士とする意図

小結

第2章 僧肇の本迹説とその背景

第1節 僧肇の本迹説

第2節 『莊子』における迹と所以迹

第3節 郭象『莊子注』における迹と所以迹

第4節 僧肇の迹に対する理解

小結

第3章 僧肇における仏身観と『大智度論』の二身説

第1節 『大智度論』の二身説

第2節 『中論』（青目釈）における如来観

第3節 『維摩詰所説経』が説示する仏身

第4節 『注維摩詰経』における僧肇の仏身理解

小結

結論

第1章は、大乘仏教の菩薩の概念についての僧肇の基本的理解を検討している。僧肇は、龍樹の『大智度論』の思想にもとづいて理解したと考えられる。その理由は、僧肇が「六住」「七住」という十地説の語を使用し、七住以降を特に重視している点による。この点について、『注維摩詰経』の中から「六住」「七住」の用例をすべて抜き出し検討を加えている。その上で、七住及び七住所得が「無生法忍」と関連付けられている点を指摘している。七住以上の菩薩は、有漏法による報いを断ち切って有為界において自在に利他教化を實踐する点に注目する。具体的には、三昧と方便であり、「無相」の行に基づいた「無方」の化などに代表されると指摘している。また僧肇はそのような菩薩を「法身菩薩」とも称する点を明らかにする。

また、「無生法忍」についての鳩摩羅什と僧肇の理解は若干異なる点も指摘する。つまり、鳩摩羅什は、無生法忍の菩薩は仏と比べて、仏法への愛習があるとする。しかし、僧肇にはこのような言及は無いのである。従って、僧肇の理解によれば、菩薩が無生法忍を得たとしてもその智力はまだ如来に及ばないので、それを「未だ任に暇閑ならざるが故に」と述べるのであると指摘する。

第2章は、『莊子』や郭象の注釈における「迹・所以迹」と、僧肇の「本・迹」とを比較し、その意味と関係性の同異を検討している。これは、僧肇が『維摩詰所説経』の主題を「本と迹」という概念によって解釈する背景を解明しようとしたのである。

論者の指摘によれば、『莊子』・郭象・僧肇の三者において、「迹」が言葉・形で表されるものという点では同じである。しかし「所以迹」の意味については、『莊子』は無規定性にあるとし、郭象は無規定性に留まらず、「迹無き者」は周囲の変化に柔軟に対応することができる点に注目しているとする。所以迹について、郭象は『莊子』よりも抽象度を高めながら、そこに道のはたらきの積極性を見出しているのである。

一方、僧肇のいう「本」とは、『維摩詰所説経』所説の不可思議解脱が言葉では表現できず、形を持たないという点では、『莊子』・郭象の「所以迹」が持つ意味と共通するが、「迹と本」

との関係は「不思議一」と理解しているとする。つまり、『莊子』では迹と所以迹は別物であり、郭象は所以迹には迹が無いと見る。一方、僧肇は衆生の教化に際しては、「迹」と「本」とは不二であると理解していると指摘するのである。用語の共通性を踏まえながら、如何に思想的に相違しているかを明らかにしていると言えよう。

第3章は、『大智度論』『中論』『維摩経』所説の仏陀観・仏身観と、僧肇の仏身・仏陀理解の関係を考察したものである。

『大智度論』は基本的に二身説を説くのであるが、初品釈（論の冒頭部分）と積曇無竭品（論の末尾部分）では内容が異なっている。冒頭に説かれる第一身は、功德の積集によって成り立ち、すぐれた相を有していると説かれる。一方、末尾の第一身は、人間の分別では捉えられない相を離れた身であると説かれているのである。その上で『維摩経』においても、同様に二種の法身を確認している。

僧肇は、一貫して法身を虚空身と理解するが、「仏には二種の身がある」といった点は明確に主張しない。さらに僧肇は二身説の第二身に相当する身については、仏の二側面のうちの一面として理解するのではなく、法身仏が具える本質とそのはたらき（作用）として理解している。それは僧肇が法身に関して「無為而無不為」などと説くことにも現れており、ここに僧肇の独自性があると指摘している。僧肇は法身を虚空身の本質を「無為」とし、衆生済度のための作用の面を「無不為」としたのである。つまり、仏身を、その本質と作用の面から見た法身観が「無為而無不為」という言葉なのであると結論づける。

II、論文審査結果の要旨

以下に、口述試問において提示された本論文の評価できる点と課題を略記する。

第1章は、大乘仏教の菩薩の概念に関して、「無生法忍」に注目した点が評価できる。『維摩経』は、冒頭仏国品で宝積が無生法忍を獲得したことを説き、第2章方便品では維摩詰が無生法忍の菩薩であったとする。つまり、両者は無生法忍という概念によって接続しているのであり、その所説の中心は無生法忍の菩薩の利他行を具体的に説くものであると見ることができる。こうした『維摩経』観は、これまでほとんど指摘されていない点であるが、『般若経』以来の重要な問題である。さらに無生法忍の菩薩を鳩摩羅什や僧肇が「法身菩薩」と称していたとする指摘は重要である。なぜなら『般若経』や『大智度論』等の初期大乘仏教の段階では、肉身・生身に対して「法身」と言うのであるが、この概念は大乘『大般涅槃経』によって、極めて普遍的な課題を担うことになり、その後の人々はその普遍的な概念によって「法身」を理解したからである。こうした事情が明確になっていないと、我々研究者は初期の課題を後期の概念によって理解するという誤解をおかしかねないのである。論考の細部については更に言及して欲しい点はいくつかあるが、論述は緻密であり、論旨の展開にも全く無理がない点は大いに評価することができる。

第2章は、『莊子』・郭象の思想と僧肇の思想の相違点を明確にした点が評価できる。僧肇

の思想と古代中国哲学、特に老荘思想との用語的な親近性はこれまでも種々指摘されてきた。しかしながら本論が明らかにしたような両者の根本的な違いの方が重要なのである。何故ならそこにこそ、インド仏教とも中国哲学とも異なる中国独自の仏教思想の展開があると考えられるからである。ただ、論者は僧肇撰述の『維摩経』の序文に例示された「四つの維摩詰の神変（迹）」を不可思議解脱と捉えているようであり、「本と迹」が不可思議解脱であるとする僧肇の思想とは若干異なるのではないかとの指摘がなされた。

第3章は、『大智度論』の二身説を前提として、僧肇の「無為而無不為」がそれを言い換えたものであることを示そうとする点に独自の視点がある。しかしながら、内容は『大智度論』二身説の紹介と、『維摩経』との相似性を用例の悉皆調査によって示すに留まっている。『注維摩詰経』僧肇注には、『老子』48章の「無為而無不為」以外にも、「無生而無不生」「無形而無不形」等といった用例が、重要な文脈の中でしばしば登場する。論者は「無為而無不為」という直接的な典拠を持つ用例のみに言及しているが、僧肇にとってこれらは同じ論理の上にあるものと考えられる。従って、こうした用例にも触れながら丁寧に論述を加えたならば論旨は一層明確になったであろう。

更に全体にわたる課題として、文体が難解で理解しにくい箇所があること。また各章の接続が若干分かりにくい点が指摘された。中国哲学の用語の説明が若干不足していることや先行研究の扱いなどに不十分な点があることも指摘された。具体的には、本論文中で参照したもの以外に、結果的に参照しなかったものも挙げる必要があるということである。また、本論文では僧肇の「本と迹」という点のみに焦点を当てているが、「体と用」「本と末」といった視点も参照したならば、結論を側面から支えることになったと推察されること。さらに本論文は、対象を『注維摩詰経』に限定したために、僧肇の主著である『肇論』には言及していない。字数の目途が示されている本論文においてはやむを得ないが、この点は今後の課題であるといった指摘が為された。

以上のように、本論文はいくつかの課題を含んではいるが、緻密な論証によってこれまでにない独自の結論を獲得しており、課程博士論文として十分に評価できるものである。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により、2018年1月11日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、竹林遊に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。